

譯詩集

海潮音

上田敏・上田敏譯

明治三十八年

遙に此書を滿州なる森鷗外氏に獻ず

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる

獅子舞歌

序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩さきの高踏派たうたと今の象徵派さうぎとに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徵派の幽婉體いうゑんたいを翻ほんするに多少の變格を敢てしたるは、其各おの／＼の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徵を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らことごとに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨てふしんるこつの技巧實に燦爛さんらんの美を

恣ほしいまにす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、ヱルレエヌの名家之これに觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇むかひに對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁くわいじふと奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳きしやうの新聲、今人胸奥こんじんの絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荊棘路けいきよくを塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶けなす者は怯けふに非らずむば情なり。

譯者嘗かつて十年の昔、白耳義文學ベルギイを紹介し、稍後やうれて、佛蘭西詩壇の新聲、特にヱルレエヌ、ヱルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を説きし時、如上文人うへのこときの作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽せいよを博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を増し勢いきほひを加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に霸を稱するに

至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の銳きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徴候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く贊同の意

を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徵派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意を表さむと試むるも難い哉。

象徵の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の概念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徵詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は

見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書??頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに懂がる、哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心狀に至りては皆相似たり。??頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然

として頭俛^たれ、齎^たらす所只幻惑の悲音のみ。孤^たり此等の姉妹と道を異にし
 たるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑^{ほふをんりん}林の樹間に「愛」と相睦み語ら
 ふならむといふに在りて、冷艷^{れいえん}素香の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロ
 セッティが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白
 す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文
 の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼^{かのいはゆる}所謂逐
 語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲眇々^{べうべう}。二月三月日
 遲々」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きささらぎ、やよひ、
 ひうらうら」と訓^よみ給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱^{おほえのあさつな}が二條の家
 に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひたる
 所多し。

明治三十八年初秋

上田 敏

燕つばめ
の歌うた彌生やよひついたち、はつ燕、

海のあなたの静けき國の

便たよりもてきぬ、うれしき文ふみを。春のはつ花、にほひを尋とむる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分そめわけ縞しまは

春の心の舞姿。

彌生來にけり、如月きさらぎは

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠りすの毛衣けごろも脱ぎすてて、

綾子りんず羽ぶたへ今いま様に、

春の川瀬をかちわたり、

しなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、足速あしはやの

戀慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡に摘む花、堇すみれぐさ、

草は香りぬ、君ゆゑに、

素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻にひつまの姿に通ひ、

わだつみの波は輝く阿古屋あこや珠たま。

あれ、藪陰やぶかげの黒鵜くろつぐみ、

あれ、なか空そらに揚雲雀あげひばり。

つれなき風は吹きすぎて、

舊巢ふるすくは啣くはへて飛び去りぬ。

あゝ、南國なんごくのぬれつばめ、

尾羽をばは矢羽根やばねよ、鳴く音ねは弦つるを

「春」のひくおと、「春」の手の。

あゝ、よろこびの美鳥うまどりよ、

黒と白との水干すゐかんに、

舞の足どり教へよと、

しばし招がむ、つばくらめ。

たぐひもあらぬ麗人^{れいじん}の

イソルダ姫の物語、

飾り畫^{ゑが}けるこの殿^{との}に

しばしはあれよ、つばくらめ。

かづけの花環こゝにあり、

ひとやにはあらぬ花籠を

給ふあえかの姫君は、

フランチェスカの前ならで、

まことは「春」のめがみ大神^{おほがみ}。

「ガブリエレ・ダンヌンチオ——『フランチェスカ・ダ・リミニ』」